

2024年/10月学習会の案内 第68回「資本論を読む会」

DAS KAPITAL

10月29日（火曜日）

午後6時30分—Zoom開催

「第25章 近代植民理論」

〔岩波文庫(三)p418-最後〕。

9月30日の「読む会」は最終的に10名の参加でした。レポーターはSugiさんでした。

「生産手段の集中と労働の社会化と資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的所有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(p415)

労働者が権力を握る。社会主義社会の到来を预言する、余り

にも有名なマルクスの言葉が出て来ます。今回の最初の論点は「本源的蓄積と原始的蓄積との違いがよく分からない」ということから議論が始まりました。これまでは二つの言葉は同じ意味で理解してきましたが、オランダなど「後の帝国主義」と言われる植民地制度、奴隷狩り、国債制度、租税制度云々が出てくると「農地を収奪し賃金労働者化を急激に進めた牧歌的」な意味に留まらなくなる。本源的蓄積という言葉はどの時点まで拡大して理解するのか—というものでしたが、結局は「同じ意味」だが、向坂訳では「原始的蓄積という言葉使わなかった」とのこと…。

いよいよ次回の「読む会」(レポーターはkatoちゃん)で第1巻が終わる。。6年と2か月かかった。10月から社青同専従者中心の「昼に資本論を読む会」(仮称)が始まった。我々はどうするか? 懇親会では「2巻目に淡々と突入するか?」とかの話が出ているが、次回にみんなで相談することにしましょう。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/> 「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Sugii



第6節 産業資本家の生成

本源的蓄積をもたらしたアメリカにおける金銀産地発見、インドでの征服と掠奪、アフリカ大陸の奴隷供給地化、ヨーロッパの商業戦争など。こうした機会に植民制度、国債制度、近代的租税制度、保護制度の政策を組織的・統合的に動員したのは17世紀末(1688年、名誉革命)ブルジョア革命後のイギリス(覇権国家に)であった。

- ・奴隷取引と掠奪に代表される植民地支配は、資本の蓄積、販路拡大、貿易(三角貿易)を発展させた。
- ・国債＝公信用制度は、眠っていた資金を動員・活性化する一方、公債証書を現金同様に流通させることで資本を供給した。(戦費調達)
- ・イングランド銀行は手形割引、担保貸付に加えて銀行券発行、貨幣鑄造の権限を持ち本源的蓄積の最も強力なテコとして機能した。
- ・国債制度は、国家収入を確保する近代的租税制度を整備し。租税制度は農民、手工業者への暴力的収奪に大きな役割を果たした。
- ・保護制度は、間接には保護関税により、直接には輸出奨励金によって、資本家を保護し商人の海外進出を助けた。

本源的蓄積は、国家的な暴力を後ろ盾として生産手段と労働者を切り離し、資本主義社会へと進めました。

資本は「頭から爪先まであらゆる毛穴から血と脂をたらしながらこの世に生まれ」たのです。

第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向

新しく生まれた資本主義的生産様式が小経営を破壊し、踏みにじって成長する。資本主義的生産様式のもとで、身ぐるみはがされた労働者は工場に投げ込まれ、資本に命ぜられるままに服従させられる。「自己の労働によって得られた、個々独立の労働個人と、その労働諸条件との癒合に基づく私有は、他人の、しかし形式的には自由な労働の搾取に基づく、資本主義的私有によって駆逐される。」

「いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。」

「資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一転に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」